



令和元年度社協バザーの様子



平成6年度社協バザーの様子

長年ありがとうございました。

「社協バザー」は令和元年度をもちまして終了しました。

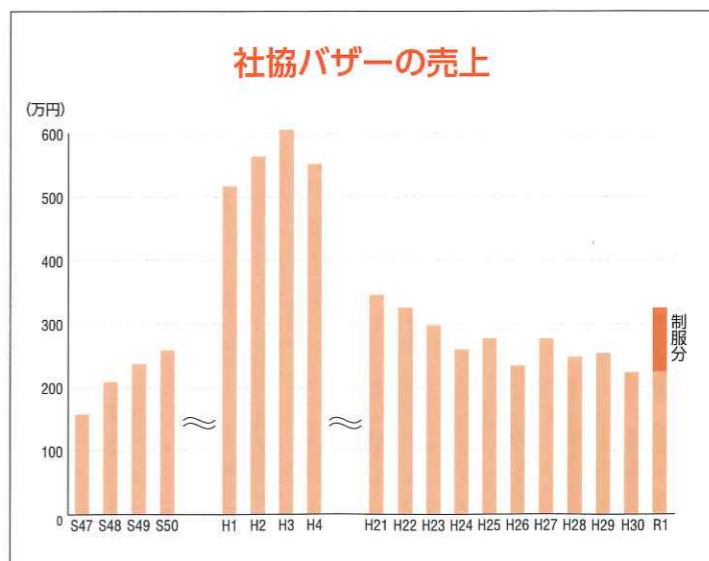
終了にいたるまでの経緯

「社協バザー」は、社協が行う地域福祉活動の財源確保を目的に、社協法人化前の昭和41年に始まり、令和元年度で54回開催となった歴史のある事業です。

バザーの収益は、ひとり暮らしの高齢者などにおせち料理を届けたり、住民参加型の生活支援を行うふれあいホームサービスの運用資金などに充てており、特に大きな収益事業がなかった時代には貴重な財源となってきました。

しかし、開始から半世紀、バザーをめぐる環境は大きく変わり、リサイクルショップの増加とインターネット売上の普及等により提供商品が減り、ピーク時には約600万円あった売り上げが近年では2分の1から3分の1程度にまで落ち込んでいました。

また、バザー実施には、前日及び当日で延べ300人のボランティアの協力を得てきましたが、中心となっていた方々の高齢化による体力的な負担も大きくなり、近年では従事



売上 R1の売上のうち約100万円は特別に提供された制服の売上

者の確保が難しくなっていました。そうした課題に対し、バザーのあり方検討委員会や会場ごとの企画委員会を設置し、ここ数年、新たな企画も取り入れて実施してきましたが、根本的な収益改善とはならず令和元年度の開催をもってバザーは終了する結論にいたりました。



第1回社協バザーに関わった 世良シズエさん (105歳)

社協バザーは、「生活に困っている世帯に、お正月の餅代を渡したい」と民生委員中心に開催したバザーを、法人化の資金を必要としていた社協主催で実施したのが始まりです。その当時は地区福祉会もなく、民生委員が一軒一軒回り品物を集めていました。

使わない贈答品が家に置いてある時代だったこともあり、訪ねて行くと奥から品物を出してくれました。どれだけ顔見知りかが問われる活動で、たくさん出してくれる家庭が多く嬉しかったことを覚えています。

今は贈答品もなく、いらぬものは持たなくなり、バザーは難しくなっているとは感じていました。奉仕的なボランティアも減っており、今の時代に合ったものを考える時期だと思えます。制度は充実しましたが、困っている人は昔より増えています。社協は原点に返り、一人ひとりの困りごとに関わっていく福祉活動を進めたいと願っています。

長年バザーに携わってくださったかたのお声

東部会場 27年前にバザーに関わり始めた頃は、お中元などの品物が並べきれないほど提供されていました。

中には高級なお酒なども多くあり、男性のかたには非常に人気だったのを覚えています。体育館の中でコーナーごとにお弁当を食べ、「寒い、寒い」と言いながらも、他の地区の皆さんと和やかな時間を過ごせたのは、良い思い出です。

中央会場 「福祉に役立ててほしい」と品物を提供くださるかたの気持ちに報いようと、バザーを行ってきましたが、最近では品物も少なく、売り上げも少なくなったと思います。

西部会場 みなさんと共に働くことで親近感を持ち、他地区のかたと交流の機会となりました。準備は大変ですが、販売は楽しかったです。

毎年バザーでの購入を楽しみにしてくださっていた皆様、物品提供や運営協力をいただいた自治会及び各地区福祉会、関係団体の皆様、そうした多くのかたの支えにより社協バザーを続けることができました。

長きに渡るご協力、誠にありがとうございました。